
イザナギイザナミ

基

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イザナギイザナミ

【Nコード】

N3116BA

【作者名】

基

【あらすじ】

那岐は突然の妻の死を受けられずにいた。妻を甦らせようと、黄泉の国へ行くのだが。

イザナギイザナミ神話をもとにしてますが、フィクションです。神様じゃなくて、普通に人をやっています。ウジとか出てくるので、苦手な人はご注意ください。

あの日は暑い日だった。

暑い暑い夏の日で、じりじりと地面は焼かれていた。地面からゆらゆらと揺れる陽炎がまるで、根の国から地上に現れた魂のように思えた。

「那美……」

紡ぎなれたその音を唇から出そうと思っても、ほとんど音にならなかった。さつきまで、ずっと今まで慣れ親しんでいたその音は、喉で留まり、大気を揺らせない。ただ、自分の掠れた声のような息が虚しく一瞬聴こえただけだった。

ふらふらと家から出て、歩き慣れた道を歩き、家へ帰ろうとした足は、家が見えた辺りで動こうとしなくなった。力が抜けて、ずっしりと身体が重い。あそこに、「日常」が詰まった家に、那美はいる。「非日常」になった那美だけが、「日常」の家にいる。

那岐にとつて、「日常」はあの家であり、那美だった。那美は動いていた。笑っていた。温かった。生きていた。

生温かいものが頬をつたった。それは止まらなくなり、身体はぶるぶると震えだした。嗚咽が漏れる。

空は突き抜けるように青く、いつそ残酷に思えた。

「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん……っ、那美……、ごめん……、ごめん、ごめん」

あの時ああしていたら。なんでもっと一緒にいなかったんだ。なんで、最後を看取ってやれなかった。どうして、あの時、外へ仲間と遊びにいったのか。なんでもっと、優しくしてやれなかった。そうしたら。そうしたら、もっと那美は生きられたかもしれないのに。きつと生きられたのに。もっともっともっとずつとずつとずつと一緒になっていたかった。いてほしかった。どうして、いつも後にならないと分からないんだ。どうしていつも、私は。

頭がかあつと熱くなる一方で、身体は熱をなくしていくようだった。

言いたいことがある。たくさんある。逝ってしまったら、何一つ言えないじゃないか。謝るから。天に言うとおりにするから、那美を返してくれ。頼むから返してくれ。

塩辛い味が口いっぱいに広がり、獣のような声が漏れる。

那岐はそこをしばらく動けなかったが、しばらくして、鼻水をすすり、赤い目を強引に拭いた。

そうして、一步一步大事に踏みしめるように家路への道を再び歩き出した。私が那美の夫だ。一番に想っている者だ。その者がしっかりしないでどうする。現実から逃れ、目を背けたら、いけない。

家に着くと、那美が横たわっている部屋に行った。折しも、そこには家臣たちは誰もいなかった。

目をつむり、横たわる那美の手をそつと握った。痩せ細った那美の手はそれでも柔らかかった。手を撫でながら、もしかしたら、ただ寝ているだけで、もう少し待ってみたら、目を開くかもしれない。そしたら、すぐにお医者を呼ぼう。食べたいものをめいっぱい食べさせてやろう。

那岐は那美の手をなでながら、じつと待った。閉ざされたその瞼が再び開いて、笑顔でその身を起き上がらせるのではないかと。

でも、でも、いくら待っても、その身は動かなかった。

いつも那美は那岐の期待に応えてくれた。無理をしても、那岐を支えてくれた。

でも、もう二度とその身は動かなかった。

那岐は滲む視界で那美を映しながら、静かに手に垂れてくるものを知った。

「王。そろそろ姫さまを埋めに行かないと」

時刻はいつのまにか夕刻になっていた。那美の手を握って動かな

い那岐の背に、臣の声が刺さってくる。

埋める。なまなましい言葉だと思った。

「ああ。準備する」

那美の手をやさしく離し、那岐は立ちあがった。

死者は里から少し離れた場所に埋葬する倣いだった。

埋葬場所に運ぶために、那美を抱き上げ、棺桶に入れる。抱き上げたとき、あまりの細さと軽さに、那岐は戦慄した。手荒に扱うと、すぐに骨が折れてしまうだろう。あらためて、那美が痩せ細りながら、病と闘っていたことを知る。どんなに頑張ったんだろう。どんなに苦しかっただろう。それでもこんな頑張った。頑張ってくれた。

また頭がかつとなったが、今度は涙は出てこなかった。枯れてしまったようだった。

埋葬場所に着き、臣とともに穴を掘る。そこは見晴らしのいい場所だった。少し小高い場所にあり、里をよく見渡せた。

穴が掘れ、そつと那美を抱き上げ、穴に横たえる。土に囲まれた那美はひどく不自然なように思えた。

これで最後になってしまふ。那美、目を開けて。じつと、那美を見たが、やっぱり那美の目は開かなかつた。

そうしてる間に、臣が那美の口元に死に水をやったり、那美が好きだった食べ物を置いたり、花を那美の周りに置いて行った。

そうして、静かに、那美の身体に土が被せられていった。

静かに、静かに、那美の身体の見える所が少なくなっていく。

やめる。そんなことしたら、窒息するじゃないか。口に出しそうになって、気づく。あの身体はもう大気を欲さぬ身体になったのだと。

太陽が完全に沈みきらぬ頃、那美の埋葬が終った。

那美がこの世から姿を消しても、世界は変わらず廻った。私のところには、いつものように「日常」の、王としての仕事があった。那美がいなくなっても、こんなに普通に世界は廻るのか。不思議であり、また滑稽だった。

「日常」のふとした所に、いたる所に那美を見つけてしまう。那美がいつもいた台所近くの部屋や、那美と一緒によく歩いた道。那美と過ごした時間はあまりに長い。当たり前のようにそこにいた存在は、私にとつて「日常」で、那美以外「日常」の世界とうまく切り離せなかった。

今度の宴の会場はどうするか、と臣に訊かれて、那美に訊いてみてくれ、と返しそうになる。仕事が一段落して、那美と一緒に休もうと那美の部屋に訪れようとする。

その度に、新しく「日常」になったそれを虚しく突き付けられる。子どもたちの方がいつそ遅しい。母を亡くしても、子どもらはお互いに支え合って生きている。

何度か、那美の墓へ行ったことがある。もしかしたら、那美と皆の冗談で、私だけに内緒にしている、那美は生きているのではないかと思つたからだ。案外、那美がひょっこり出てきて、「びっくりした？」と言うんではないかと期待した。

だが、那美は出てこなかった。

いつの日か、私は耐えかね、根の国から那美を連れ戻そうと考えた。黄泉の国の王も、必死にお願いをすれば、那美を返してくれるかもしれない。いや、那美が帰ってきてくれるなら、なんでもしよう。国が欲しいといえば、私の国を差し上げよう。

根の国に行き、死者に会うことは禁忌中の禁忌とされていた。那岐はそれを破り、皆に内緒で根の国の扉を開いた。

そこは薄暗い世界だったが、これで再び那美に会えると思うと怖くなかった。そうしてどれくらい歩いたか分からぬなった頃、突然、

見知った声が聴こえた。

「あなた……?!」

それは待ち望んだ声だった。待つて待つて、切望した声だった。この者に再び会って触れられるなら、なにも望まないと思った人の声だった。

暗闇の向こうから、人影が現れ、那岐の前に走ってきた。近くで見ると、それは見慣れた那美その人のものだった。

那岐は感無量になり、ぎゅっと抱きしめた。愛しくて愛しくてたまらなかった。

たとえ、その身体がウジにまみれていようと。

ウジがなんだというのだ。ウジが出ていようと、それは那美の身体だ。ウジなど後から、いくらでもとってあげよう。今はそれより、再び会うことができた那美の存在を確かめたい。ぎゅうと那岐は那美の身体を自分に押しつけるように抱きしめた。

「那岐、どうしてこんな所まで来たの」
触れられる。喋られる。

以前は当たり前前だったのに、今はそれがどんなに素晴らしいことなのか分かる。

「那美、私と一緒に現世に帰ろう。そなたを迎えにきた」

那美の肩に手を置いて、その瞳を見つめる。

ああ、那美の目だ。那美の目に再び、自分が映ってる。それだけで那岐は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

だが、那美の目が大きく見開かれ揺れた。

そして、そつと那岐の手を外そうとする。

「那岐……。無理よ。知っているでしょう？ 私は死んだのよ」

「無理じゃない！ 那美。那美、頼むから一緒に私と帰ろう。黄泉の国の王には、俺から交渉する」

下を向く那美に、那岐は必死に説得しようとした。

が、躊躇うようだった那美は、何か決意したように再び那岐の目をしっかりと見た。黒曜石のようなきれいな目が、那岐を情けない

顔を映した。

「那岐」

そつと那美の手が那岐の頬をなでる。以前とは違う、冷たさを帯びる手。それでもその手は柔らかく、那岐を包んだ。

「那岐……。分かるでしょう…？ もう私は現世の人間ではなくなつてしまったの。私は現世に戻れないわ」

それは決して多く言葉を紡いではいなかった。

だが、それは、それまで頑なだった那岐の身体の中心にするりと降ってきた。慈しむように、那美の柔らかな声は那岐を素直にさせ、そして温めた。

那美が死んだ。

充分知っているはずだった。充分理解しているはずだった。だからこそ、那美を取り戻そうと、根の国まで遠い旅路をたどってきた。だけど、それがそもそも間違いだということを分かった。那岐は何一つ分かつていなかった。

那美が死んだということを、何一つ分かつていなかった。認めていなかった。

正気を取り戻したかのように、やっとその事実を受け入れた那岐の、凧いだ目を認めて、那美は微笑んだ。それは、那岐が大好きだった那美の微笑みだった。母のように、姉のように、妹のように、そして妻として、那美はいつだって那岐を陰日向に支えてきてくれた。柔らかな慈愛で那岐を包み、いつだって共に生きてきた。

お互いが「対」となる存在として、お互いがお互いを補うようにそこに在った。

那岐はまた視界が滲むのが分かった。そしてまた、那美の目が赤く潤んでいるものを知っている。

那岐は、再びぎゅっと抱きしめた。できるだけ優しく、慈しむように。

那美の両手が那岐の背中に廻る。

那美の首に、顔を埋めた。ウジにまみれながらも、それは愛おしか

った。

「約束する。来世は共に生きよう」

「ええ。約束よ。来世は共に」

「ああ。約束だ」

共に生きて、共に黄泉路に下ろう。同じ時の永さで生きよう。

暗い地の底で、夫婦は約束した。思えば、なんて単純なんだろう。生まれた時から、許婚であり、そのまま特に疑問に思わず夫婦となった。子を設け、国を創った。激しく恋に落ちたというわけではなく、夫婦として最初から決められていたから、結婚しただけだ。だが、夫婦として長い月日を共に過ごすうちに、それはいつのまにかこんなに大きな情になっているとは思わなかった。激しさはない、穏やかで静かな情は、降り積もった年月の中で確かに芽吹いた。

「那岐。帰ったら、まずお風呂に入って、身体を清めてね。あなたは放っておくと、平気で一週間は入らないんだから。子どもたちが真似したら大変だわ。それとちゃんと食事を一日三食食べること！めんどくがっちゃだめよ？」

小うるさく言ってくる那美を以前はうっとうしいと思ったものだが、今はそれが逆にうれしい。

「わかったわかった」

「それと、……子どもたちを私の分まで愛してあげてね。宿題よ」子どもたちの話題になると、那美は淋しそうに微笑んだ。

那美はお腹を痛めて産んだ子どもたちを本当に愛していた。

那岐はそつと那美の頭をなでた。

そうして気づく。那美を亡くしてから、子どもたちの存在をぽっかり忘れていたことを。あの頃は、那美を追い求めてばかりで、子どもたちを気にかける余裕はなかったし、子どもたちとよくそばにいた那美の存在を思い出すのが辛く、できるだけ関わらないようにしていた。父親として、なんて無責任なことをしていたんだろう。

「ああ。たくさんいるけど、頑張ってみる」

言つと、那美はくすくす笑った。

現世へ帰ってくると、日の光がひどく眩しかった。片手をあげて、光を遮ろうとすると、そこに自分の手潮を見た。それは「生」の象徴のように思えた。

久方ぶりに家へ戻ると、臣や子どもたちが駆け寄ってきた。

「王！！ どこへ行かれていたのです？！」

「ああ、ご無事でよろしゅうございました！！ 奥様のもとへ行かれたのではないかと心配で心配で……」

「悪かった。なにも言わずに何日も家を空けて」

涙を流す臣たちをなだめる。ここまで心配されているとは。改めて、那美に会いに行く前の自分の精神状態が異常で、皆を心配させていたか分かって少々いたたまれない。

そうして、那岐を取り囲む臣とは反対に、少し遠巻きに自分を見つめる小さな者たちを見つけた。那岐は静かに歩み寄り、視線を合わせるように膝を折った。

那美によく似た黒曜石の大きな目の長女が那岐を見た。

「父上、大丈夫？」

長女はまだ自分も年端もいかないのに、最近産まれたばかりの弟を抱いていた。その横に弟妹たちがいて、心配げに那岐を見上げている。

母を亡くして、この子らも辛いだろうに。それ以上に腑抜けた父を前にしたため、彼らは気丈に振る舞ったのだろう。

那岐は子どもらを、両手をめいっぱい広げて、皆を抱きしめた。「ごめんな。もう大丈夫だ。……今までよく頑張ったな。ありがとう」

父の突然の抱擁に、皆目を白黒させていたが、父の力強い腕抱かれほめられ、安心したせいか、一人の子が大声で泣き出したのを皮切りに、皆大声で泣き出した。

「うわあああああん！！！！！！ 母さまー！！！！！！」

「母さまに会いたいよお！！！！！！」

「うわあああああん！！！！！！」

大声で泣く子どもたちを那岐は大切に抱きしめた。

伊邪の家はやつと喪に服すことができた。

「よかつたのか、伊邪那美？ 伊邪那岐がお前を現世へ返したいと私に言えば、返してやれたかもしれないのに」

那岐が帰った後、黄泉の王は那美の所へ現れ、もつたいないと言うように呟いた。

「いいんです。摂理に逆らって、私だけ甦っても、それは擬いものです。それに私、約束しましたから。彼とまた来世で出会おうって甦りというチャンスをふいにしても、全く気にしてない様子の那美に、黄泉の国の王は不可解そうに笑った。

「全く、お前たち夫婦も数奇なものだな。適当に夫婦になったらうに、甦りを願うほど相手を大切に思うとはな。それでいて、結局甦りはせず、一方は生者の世界で生きていき、お前はここにいる。」

那美は黄泉の王を見て、また視線を現世の方向に戻した。

「黄泉の国の王さま。人はね、たまたま生まれたから、生きるのよ。生まれたから、生きればいいの。別にそこにたいした目標とか、何かを人生の中で成し遂げたとかなんて、いいの。そりゃあ、やれたらたいしたことだけど。だけど、生まれたから生きる。これが一番シンプルで、生きること素直で誠実だと思うわ。私は那岐に生きてほしいって思ったの」

王是那美の独白を聞くとはなしに聞いていたが、あまり気に入らなかつたようだ。めんどくさそうに欠伸をする。

「お前が何を言いたいのか分からんな」

「いいの。主義の話だから」

「そういうものか」

「そういうものよ」

ふーん、と言うと、黄泉の王は消えてしまった。

それから数十年後、那岐が土産話をたくさん持って、再び黄泉の国で那美と出会い、それから再び一緒に輪廻の輪に飛び込んだのは別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3116ba/>

イザナギイザナミ

2012年1月8日01時47分発行